
ヘタ鬼　～トリップ!!皆で脱出しようね。～

翠風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタ鬼 〜トリップ！〜皆で脱出しようね。〜

【Nコード】

N8761Y

【作者名】

翠風

【あらすじ】

『液晶退けえええー！！！！』

【ヘタ鬼】の動画を見ていた二人の少女、黒羽とホワイト。二人は【ヘタ鬼】の世界にトリップして、皆を助けたいと望んでいた。そんな彼女達の前に突然、彼くが現れる。彼くは彼女達に「皆を助けて欲しい。」と頼み、二人はその頼み事を引き受ける。

『大丈夫。』

『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせます。』

『僕達に任せてよ もう、巻き戻させたりしないからさ』

果たして、イレギュラーである二人の少女は、歪んだ空間から皆を救い出すことができるのか？

ブローグ　『液晶、そこを退け!!』

日本のどこかの家

パソコンの画面を食い入るように見つめる二人の少女がいた。どうやら、何かの動画を見ているようだ。

??　『……………うわああー……ん!!……!!』

液晶退けえええー!!……!!　(泣)

??　『!?(ビクッ)』

突然、黒髪の少女がパソコンに向かって叫び始めた。
いきなりのことに隣に座っている白髪の少女は驚き、ビクリと大きく肩を震わせた。

??　『ちょ、ちょっとホワイト、気持ちは分かるけど落ち着いて……』

??　『黒羽……。だって……だって……!!　(泣)』

白髪の少女…黒羽は黒髪の少女…ホワイト・フェザーことホワイ

トを宥めるが、ホワイトは尚も泣き叫んだ。

ホワイト『僕の力を使えばトニーもどきを倒せるかもしれないのに……わああー！やっぱり液晶退けえー！皆を助けるんだー！！（泣）』

黒羽『…私も同じ気持ちだよ。皆さんを助けられるなら助けたい…。』

そう言うとき黒羽は視線をパソコンの画面へと戻し、とても哀しそうな顔をした。

ホワイトも一旦泣き止み、黒羽の視線をたどって視線をパソコンの画面に戻し…

ホワイト『うわああー！ん！』

また泣き始めた。

黒羽『…………グスッ。』

さっきまで我慢していた黒羽もつられて泣き始めてしまった。

現在、黒羽とホワイトは【ヘタ鬼】の動画を見ている。

黒羽『……でも、ホワイトの言う通り液晶が退いてくれたら良いのにね……。』

黒羽はポツリと呟いた。　すると…

??「…助……やって…れ。」

二人『…!?!?!?』

どこからともなく、声が聞こえてきた。

黒羽『…今、何か聞こえた?』

ホワイト『黒羽にも聞こえた?…ってことは僕の気のせいじゃないんだね…。でも、一体どこから?』

??「…ここだ…。」

二人『…!?!?!?!?』

二人で首をひねっていると、また声が聞こえてきた。
そして二人は声のする方…パソコンの方に顔を向けた。するとそ

ここには…

黒羽『えっ！？…君は………』

ホワイト『神聖ローマ！?!?!?』

パソコンの画面に映っていたのは【ヘタリア】の登場人物で、消えてしまったはずの少年…神聖ローマだった。

黒羽『どうして神聖ローマ君がここに?』

黒羽はパソコンの画面に神聖ローマが現れたことに驚きながらも、至って落ち着いた口調で聞いた。

神聖ローマ「…お前達に頼みがある。」

ホワイト『…なあに?』

いつもと違い、真剣な表情をするホワイト。黒羽も神聖ローマをじっと見つめる。

神聖ローマ「…イタリアを…皆を…助けてやって欲しいんだ。」

二人『『いい（です）よ。』』

神聖ローマ「!？」

あまりにも返事が速かったので、神聖ローマ驚いていた。

神聖ローマ「本当にいいのか？」

ホワイト『だって僕達、皆を助けたいんだもん。ね、黒羽？』

黒羽『うん。それにさっきその話をしたばかりだし…というか、神聖ローマ君は私達がイタリアさん達を助けたいって話をしたから来てくれたんでしょ？』

神聖ローマ「…ああ、そうだ。」

黒羽の言葉に神聖ローマは少し苦い顔をしながら頷いた。

ホワイト『じゃあ、早速行こ（黒羽『あっ!!』』

黒羽は何かを思い出したように大きな声を出し、俯いた。

ホワイト『どうしたの！？黒羽！！』

黒羽『いや、その…』

ホワイト『？』

黒羽『私…戦えるかな？』

ホワイト『あつ…』

ホワイトも『そう言えば』と、困ったような表情をした。

黒羽『ホワイトは魔法を使えるし、戦いにも慣れてるけど、私は…』

神聖ローマ『それなら、問題無い。』

黒羽『えっ…』

神聖ローマ『俺が力をやる。そうすれば、お前も（黒羽『黒羽。』）？』

黒羽『私のことは黒羽、って呼んでいいよ。（ニコッ）』

ホワイト『僕はホワイト、でいいよ。（ニイッ）』

神聖ローマ『／／／分かった。…話を戻すぞ。俺が力をやれば、黒羽も魔法を使えるようになるし、武器なんかを使って戦えるよう

にもなる。」

黒羽『へえ…ありがとう。神聖ローマ君は凄いなだね。』

神聖ローマ「いや、別に…。それに礼を言うのは俺の方だ。こんな無茶苦茶な願いを聞いてくれて…本当にありがとう。」

神聖ローマはペコリと頭を下げた。

二人（／＼／＼かわいい…。）

見たことのない神聖ローマの行動に二人は小さく感動していた。

ホワイト『ねえねえ、神聖ローマ？』

神聖ローマ「？何だ、ホワイト。」

ホワイト『神聖ローマは僕が何なのか知ってるの？』
神聖ローマ「…知ってる。」

ホワイト『ふん…そっか ならいいや』

黒羽『ホワイト…。』

少し、沈黙が続く。

神聖ローマ「…では、お前達二人を【あの屋敷】へ送るぞ！」

黒羽『うん。』

ホワイト『よしきた！』

黒羽『ホワイト…それ、漁師さん達が使う言葉…。（汗）』

ホワイト『えへへ…』

神聖ローマ「……link……offnen……!！」

神聖ローマが何か呪文のような言葉を呟くと、パソコンの画面からまばゆい程の光が溢れだし、黒羽とホワイトを包んだ。そして、光が収まる頃には二人の姿は消えていた。

神聖ローマ「…頼んだぞ、二人とも。」

パソコンの画面はブツツと音を立てて、消えてしまった。

主達を無くした家は静寂に包まれるのだった。

設定（前書き）

主人公達の設定です。なんかもう、無茶苦茶な感じですね
…。

設定

設定

名前：千晶^{ちあき} 黒羽^{くれば}

容姿：白い髪に緋色の瞳の少女。髪は肩にギリギリ届くくらいの長さ。

普段は年齢よりも大人びて見えるが、笑うと年齢より幼く見える。可愛い。ホワイト・フェザーと同じ顔をしている。

服装

- ・白のトレンチコート（丈短め）
- ・黒のショートパンツ
- ・白のブーツ
- ・ブレスレット（水晶を抱く黒い竜の形）
- ・胸元に紅い大きなリボン

身長：161.7cm

年齢：16歳（高校1年生）

性格：優しい。落ち着いた雰囲気を持っている。真面目。

1人称：私

その他：話すときは基本、敬語。

ホワイト・フェザーを「ホワイト」と呼んでいる。

友達に薦められて【ヘタリア】を知り、ハマった。それから【ヘタ鬼】の動画も薦められて見て、みんなを助けたいと思っている

た。

頭が良く、スポーツもそこそこできる。

一軒家にホワイトと一緒に暮らしている。家族は皆、他界している。

母親は日本人（黒髪に黒い瞳）、父親はアメリカ人（金髪に瑠璃色の瞳）だった。瞳の色は父方の祖母から遺伝した。昔は黒髪だったが、ある事件くをきっかけにショックを受け、白くなってしまった。

名前：ホワイト・フェザー

容姿：黒い髪に瑠璃色の瞳の少女。髪は長く、ハンガリーくらいの長さ。人間ではないらしく、トリップ前の世界では透けていた。だが、トリップ後は実体を持っている。

可愛い。黒羽と同じ顔をしている。

服装

- ・黒のケープ
- ・深緑のショートパンツ
- ・白のハイソックス（長さは膝上）
- ・深緑のブーティー
- ・ブレスレット（水晶を抱く白い竜の形）

・首もとに紅い小さなリボン

身長：161・9cm

年齢：??

性格：明るい。常にテンションが高い。よくふざける。自分の思っていることははっきり言うタイプ。

1人称：僕。たまに私。

その他：誰に対してもタメ口で話す。

黒羽と一緒に【ヘタリア】や【ヘタ鬼】を見て、自分もハマった。

「ホワイト・フェザー」という名前は黒羽が付けてくれたと言っている。魔法を使える。また、戦いの経験があるらしく戦える。強い。

設定（後書き）

次は第一話です。

【あの屋敷】に到着します。

第一話 【あの屋敷】へ到着（前書き）

予告通り、【あの屋敷】に到着します。
内容はタイトル通りです。

第一話 【あの屋敷】へ到着

黒羽『……ん……ここは……？』

神聖ローマ「起きたか？」

黒羽『…神聖ローマ君……？……！？何処にいるの！？』

黒羽は神聖ローマの音がすぐ近くから聞こえたので、てっきり隣にでも居ると思っていた。だが、近くに神聖ローマの姿は無かった。

神聖ローマ「右手のブレスレットを見る。」

黒羽『えっ？う、うん。』

黒羽は神聖ローマの指示通り右手に付けたブレスレットを見た。

黒羽『……あ……！？』

ブレスレットを見ると、水晶の部分に神聖ローマの姿があった。

神聖ローマ「俺は普段はで黒羽とホワイトのブレスレットの水晶の中で二人のことを見守っている。だが、必要なときには力を貸そう。」

黒羽『うん。…その言い方からすると、神聖ローマ君は私達のプレスレットを自由に行き来できるの?』

神聖ローマ「ああ…。」

黒羽の問いに、水晶の中で神聖ローマは頷いた。

ホワイト『…うん…!ここは!?!』

先程まで気を失っていたホワイトもようやく目を覚ました。

黒羽『おはよう、ホワイト。』

ホワイト『うん!おはよう、黒羽…で、ここはどこ?』

神聖ローマ「3階の図書室だ。」

ホワイト『へ、本当に【あの屋敷】に来たんだね…で、えっ!?!神聖ローマどこ?!?』

黒羽『ホワイト、左手のプレスレットを見て。』

ホワイト『へっ?う、うん。』

ホワイトは黒羽の促すままに左手に付けたブレスレットを見た。

ホワイト『…あっ！？神聖ローマ！！！何で水晶の中に居るの！？』

神聖ローマはいつの間にか、黒羽のブレスレットからホワイトのブレスレットに移動していた。

神聖ローマ「俺は黒羽とホワイトのブレスレットの中を自由に行き来できる。」

ホワイト『へえー！！！すっっ！！！』

神聖ローマ「／／／いや、それほどでもない…。」

ストレートにほめられ、神聖ローマは少し照れた。

黒羽『……………』

黒羽は二人のやり取りを横目に見ながら、何かをしていた。

ホワイト『…それじゃ早速トニーもどき退治にしゅっぱーっ…！』

黒羽『お、おおー…？』

ホワイト『さ、神聖ローマも』

神聖ローマ「あ、ああ…おおー…」。」

ホワイト『もー！！二人とも元気ないな！』

二人の元気のない「おおー」にホワイトは頬を膨らませた。

黒羽『ごめん、なんかこういうの慣れなくて…』

神聖ローマ「…俺もだ…。」

性格が真面目な二人組は苦笑いしながら答えた。

ホワイト『全く…二人とも各自練習しておくように！』

黒羽『は、はい。』

神聖ローマ「わ、分かった。」

ホワイト『よろしいじゃ、行くよ〜。』

そして3人は図書室を後にするのだった。

廊下

ホワイト『そう言えばさー、黒羽…。』

黒羽『？』

廊下を移動中、ホワイトが黒羽に話し掛けてきた。

ホワイト『黒羽、戦えるの？魔法の練習とかしなくて大丈夫？』

黒羽は【この屋敷】にトリップする前はただの女子高生だった。
神聖ローマから力を貰ったとはいえ、まだ使ったことはな…

黒羽『大丈夫 さっき練習したし、戦い方も頭の中に入ってるから。』

』

くも無かった。

ホワイト『いつの間に!?!』

黒羽『大体は夢の中。あとはホワイトが神聖ローマ君と話してる
きに。』

ホワイト『夢の中?』

黒羽『そうだよ。(ニコッ)』

不思議そうな顔をするホワイトに黒羽は笑いかけた。

神聖ローマ『…ということは上手く行っただってことか。』

ホワイト『へ?』

今度は神聖ローマの言葉にホワイトは不思議そうな顔をした。

神聖ローマ『俺が「眠っている間に訓練ができる空間」を黒羽の頭
の中に作ったんだ。なんなら、ホワイトにも作ってやろうか?』

ホワイト『うん!?!作って作って!?!』

黒羽『私の頭の中に戦い方を入れてくれたのも神聖ローマ君だよね？』

神聖ローマ「そうだ。」

ホワイト『神聖ローマすげー！！……よし、僕も頑張るぞ』

ホワイトは両手をグーにして、上に掲げた。

神聖ローマ「………すまないが、力を使いすぎて疲れたから俺は少し休むぞ……。」

黒羽『あつ、うん。ゆっくり休んでね。』

ホワイト『お休み』

神聖ローマ「……………」

黒羽『……眠ったみたいだね。』

ホワイト『だね。』

黒羽とホワイトは顔を見合わせて、笑った。

ギャ――！！

ウワ――！！

二人『！！』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイト！』

ホワイト『うん！！』

二人は悲鳴のした方へ急いだ。

イタリア side

俺「ハアツ…ハアツ…。」

今、俺は「あいつ」から逃げている。

俺「…！！全く…しつこいなあ…。」

周りには俺以外、誰も居ない。
俺は立ち止まり武器を構えた。

俺「…来るんなら来れば？」

そう言つと、あいつは凄い速さで俺に向かって来た。
俺はあいつの攻撃に備え、武器を強く握りしめた。すると…

??『ていやー！！』

キンッ

俺「！？」

突然、後ろから槍を持った黒髪の女の子が現れてあいつに斬りかかった。

俺「えっ…えっ…！？」

??『うわ…思ってた以上にかたっ！！なら…これでどうだ！！』

混乱する俺をよそに、その子は槍を（どっという仕組みかは分からないけど）大剣に変えて、再びあいつに斬りかかった。

ザクッ

??『おっ！いけたいけた』

トニー（？）「グギヤー」

あいつは少し怯んだ。

?? 『大丈夫ですか？茶髪のお兄さん。』

俺「えっ!？」

気が付くと、俺の隣にはさっきの子にそっくりな顔をした白髪の女の子がいた。

?? 『ここは私達に任せて逃げて下さい。』

俺「き、君達は一切…どうして…ここに…何で…。」

俺が聞くとその子は困ったような顔をして、答えた。

?? 『今はまだ言えません。…でも1つだけ言えるのは…』

私達はあなた方の味方です。』

その子は一旦言葉を切り、俺の目をまっすぐ見つめ、とても優しい笑顔で言った。

俺「どういうこと？俺達の味方って？君達の名前は？どっやってここに来たの？ねえ!！」

??『すみませんが強行手段に出させて頂きます…
彼の者を我が意のままに…メニニューバー!』

その子が呪文を唱えると、俺はの意思とは反対に走り出し、その場から離れ始めた。

俺「!?!何これ!?!体が勝手に!?!」

??『私の魔法ですよー!』

後ろを振り返るとあの子が叫んでいた。

俺「待って!!まだ聞きたいことが…。」

あの子達の姿がどんどん小さくなっていく。そして、俺の体は廊下を曲がり遂に見えなくなってしまった。

三人称 side

黒羽『行つたね。』

ホワイト『うん。』

二人は顔を見合わせ、イタリアが向かった方向を見ながら呟いた。

二人『大丈夫。』

黒羽『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせます。』

ホワイト『僕達に任せてよ もう、巻き戻させたりしないからさ』

トニー(?)『ニガ、サ…ない……。』

黒羽『別に逃げませんよ。』

ホワイト『むしろ、そっちが逃げないでよね』

黒羽は魔導書を、ホワイトは大剣を構えた。
二人の口元には笑みが浮かんでいた。

第一話 【あの屋敷】へ到着（後書き）

第二話は、明日投稿の予定です。

主人公達がトニーもどきと戦います。

閑話 神聖ローマがくれた力について（前書き）

すみません。初めての戦いの前に閑話を入れさせて頂きます。

ホワイトが黒羽に神聖ローマからどんな力を貰ったか質問する話です。

閑話 神聖ローマがくれた力について

イタリアとトニー（？）に遭遇する前のこと…

ホワイト『ねえねえ、黒羽。』

黒羽『？何？ホワイト。』

ホワイト『黒羽はどういう風に戦うの？』

ホワイトは黒羽から、黒羽は神聖ローマから力を貰い戦えるようになったとは聞いたが、具体的にどう戦えるようになったかは聞いてなかったことを思い出し、黒羽に質問した。

黒羽『あ…そう言えばまだ説明して無かったね。』

そう言つと黒羽は懷から紙とペンを取りだし、サラサラと何かを書き始めた。

黒羽『…つと。私の戦い方を簡単にまとめると、こんな感じだよ。』

黒羽は先程何かを書いた紙をホワイトに見せてきた。

ホワイト『どれどれ…』

ホワイトは紙を覗き込んだ。紙には、次のように書かれていた。

- ・戦い方はそのときの「ジョブ」によって異なる。
- ・「ジョブ」とは職業のことである。
- ・「ジョブ」は一度に2つ、掛け持つことができる。
- ・2つの「ジョブ」の組み合わせにより、新たな「スキル」を使えるようになる。
- ・「スキル」とはジョブ毎に使える特別な技である。
- ・ジョブは「ジョブチェンジ」という魔法で自由に変えられる。
- ・「ジョブチェンジ」だけは、どの職業のときでも使える。

ホワイト『…なるほどね』

ホワイトは黒羽の書いた紙を読み、理解したようだった。

ホワイト『それで黒羽は今、何と何のジョブを掛け持ちしてるの？』

黒羽『私が今掛け持ちしてるのはウィザード（魔導士）とディーバ（歌姫）だよ』

ホワイト『ディーバ？』

黒羽『ディーバっていうのは、名前通り【歌声】で戦うんだよ。戦

い以外にも、回復や仲間のサポートも出来るんだって。』

ホワイト『わあ……で、他にはどんなジョブがあるの？』

黒羽『そうだね……ソードナイト（剣士）やパラディン（聖騎士）、プリースト（僧侶）、アーチャー（弓手）なんかもあるよ。』

ホワイト『へー……なら、その場に応じて戦えるんだね。』

黒羽『うん。……ってそれはホワイトも同じでしょう？魔法使えるし、武器も自由に出して使いこなせるし。』

ホワイト『ま……ねえ』

ホワイトは黒羽の言葉に胸を張って答えた。

ホワイト『けど、やっぱり僕は武器で戦うのに慣れてるから、黒羽には魔法で援護して貰っていいかな？』

黒羽『いいよ。……というか、今の私のジョブじゃ援護しかできないから（汗）』

ホワイト『んじゃ、よろしく』

ホワイトは右手をグーにし、親指を上立てニカツと笑いながら黒羽に向けた。

ギャーーーー！！
ウワーーーー！！

二人『！！！！』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイト！』

ホワイト『うん！！』

そして二人は悲鳴のした方へ急ぐのだった。

閑話 神聖ローマがくれた力について（後書き）

次こそ、初めての戦いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761y/>

ヘタ鬼　～トリップ!!皆で脱出しようね。～

2011年11月27日08時51分発行